

「物語」の舞台としての図書館

山 岸 郁 子(准教授 文学)

図書館が登場する「物語」(小説・映画・ドラマ・漫画など)を誰でもいくつか思い浮かべることができるだろう。映画だけでも軽く100を越えるほど図書館が登場する作品は多い。もちろん最も多いのは物語の主人公が、ある疑問を抱いて図書館の資料や新聞を調査するシーンである。『クレヨンしんちゃん嵐をよぶアップレ! 戦国大合戦』(2002)ではしんのすけが手紙(のようなもの)を残して行方不明になる。父ひろしはその謎を解くべく図書館へ向かい、歴史書をひもとくとそこには「天正2年の戦で野原信之介とその一族が奮戦」との記録が……といった具合。

調査目的以外の図書館の描かれ方としては、①出会いの場所として(『ある愛の詩』1970: 図書館でアルバイトをしている女性のもとにハーバード大学の男子学生が本を借りに来て恋に落ちる)、②探検の拠点として(『インディジョーンズ最後の聖戦』1989: 床に書かれた文様を解読すると地下通路へつながり冒険が始まる)、③亡霊の棲む場所として(『ゴーストバスターズ』1984: ニューヨーク市立図書館でのゴースト騒動が事件の発端となる)などがある。

また、閉鎖された空間としてだけではなく『グッドモーニングベトナム』(1988)では米軍がベトナムの戦地にも図書館サービスを展開していることが描かれているし、『ショーシャンクの空に』(1994)では主人公が刑務所の中に図書館を作ろうと尽力している姿が印象的だ。これらの図書館は精神の自由が保障されるための場所である。

他には2008年4月からフジテレビ「ノイタミナ」枠でのアニメ化が決定した『図書館戦争』シリーズにおける国家の比喩としての図書館、なんてものもある。

このように図書館モノは数だけではなく、そのバリエーションも豊富であることがわかるだろう。

さて、先に述べた①〈出会い〉のパターンでみなさんが思い浮かべる作品には『耳をすませば』(1995)があるだろう(あってほしい)。「好きなひとが、できました」という糸井重里のコピーと「カントリーロード」のメロディを思い起こしてグッときている人もいるかもしれない(いてほしい)。グッとくる理由についてはここでは触れない(紙幅が足りない、くやしい)。ここで主人公月島雫が運命の人である天沢聖司の名前を知るのが図書館の貸し出しカードによってなのである。この設定について個人情報保護といった観点から本の貸し出しのバーコード化を進めている日本図書館協会からクレームがついた。DVDには「現在このような貸し出しの方法は行なわれていません」といった字幕がついており、無粋極まりない。もとい、雫と聖司は読書好きといった共通点からお互いを知ることになる。つまりここでの図書館は他者が不自然なく一つのものを共有する場所、本を介して他者と出会う場所として描かれている。

もちろん出会いは利用者同士ばかりではなく、図書館司書と利用者という場合もある。『ジャイアンツ・ハウス』(1999)では司書のベギーと身体が朽ちるほど伸び続ける「巨人症」の少年ジェームズが出会う。図書館司書がこれまた真面目で奥手で内向的な(暗い)女性というステロタイプで描かれることが多い。たとえばキムタク主演の北川悦吏子ドラマ『Beautiful life』(2000)では常盤貴子演ずる司書の杏子は難病で車椅子を使いながら小さな世界の中で生きている。向田邦子ドラマ『阿修羅のごとく』(1979)の三女滝子もまた黒縁眼鏡をかけた潔癖症の図書館司書だ。そんな司書が出会い(もちろん異性と)によって閉ざされた小さな世界を飛び出していく、というのがこのテの「物語」パターン。

「図書館で出会い?んなものあるわけないじゃん」と思うだろう。そのとおり、そんなものは静寂をルールとしている図書館ではまずない。だが、「物語」の中にはある。日常のルールを突き破って、「物語」の中の図書館で人々は出会い、交錯している。「物語」の中で静寂は破られるためにあるのだ。破る禁忌のある図書館はこれからも「物語」に描かれ続けることになるだろう。

最後に多くの図書館モノの中から『としょかんライオン』(2006)という絵本を紹介したい。ある日図書館にライオンがやって来る。もちろん大騒ぎになるのだが、図書館長のメリウエザーは「きまり」さえ守れば、と言ってライオンを受け入れる。ライオンは毎日やって来て、本の読み聞かせに耳を傾け、やがては配架や掃除の手伝いをするようになる。ライオンは図書館に来る人みんなに愛されてゆくのだが、そんな時一つの事件が起こる……。ライオンは本能に逆うことができず、図書館は阿鼻叫喚の地獄絵図……。なんてことはあるわけない、ハートウォーミングな作品です。この作品は図書館が誰にでも分け隔てのない場所であることがシンプルかつ丁寧に描かれているばかりではなく、理由があれば「きまり」を破らなければならない場合もある、ということもきちんと書かれてある。だから児童書は侮れない。お薦めです。

